

定時制と養成工と高度経済成長

26 期 兼田吉治

米焼酎の里“球磨郡”は九州の山間部に在る。熊本から八代を抜けて、日本 3 急流で名高い球磨川沿いに遡ること 80km。そこに球磨盆地はある。1000m 級の山々に囲まれた盆地は東西 30km、南北 15km。内陸性気候で昼夜の寒暖差が激しく、秋から春にかけては盆地全体がすっぽりと霧につつまれる”あさぎりの町”であり、日本の米焼酎の代表的生産地でもある。

私は、この盆地の中央部に位置する免田町で 1947 年に生まれ 1962 年春の中学卒業まで過ごした。生家は貧しい農家である。このため中学卒業と同時に大手電機メーカーの技能訓練生として就職した。この会社では 1959 年から養成工を技能訓練生と制度変更しており、その 3 期生として 1962 年 4 月に入社した。技能訓練生では工業高校に準じた企業内教育を 3 年間受けて職場配属となる。入社時は高校入試が終わっているので、1 年遅れて 1963 年に北野定時制を受験した。こうして技能訓練生と定時制との 2 重生活が始まった。当時は戦後の高度経済成長の真っただ中である。



敗戦でどん底に陥った産業活動が、欧米に対し大幅に差をつけられた技術の遅れをとりもどすため、集中的な技術導入を図り、石油化学、製薬、鉄鋼、電機に至るあらゆる分野においてその技術力を高め、飛躍的な成長を遂げた。この時期の技術導入の特徴は、外国で完成された新技術の大量導入であった。ここに中堅技能者としての養成工教育を受けた人達の生産現場での活躍の場があった。

中学卒を対象とする養成工の多くは優秀な地方出身者で、応募倍率は高校入試以上であり、寮生活をしながら 3 年間の工業関係社内教育を受ける。学校法人ではないため卒業しても高卒資格が無く、多くは夜間高校に通い一般教養も身につけていた。私の同期 26 期生においてもクラス男性の 3～4 割は養成工の人達であった。

完成された欧米の技術はそのまま生産現場に持ち込まれた。英語記述された技術仕様書や特許、インチサイズの図面、これらの作業要領書を解読して、ISO 単位に図面化し製品を作り上げる。技術内容を咀嚼して現場に伝え、チームワークで仕事を成し遂げる。自分だけでは克服出来ない課題は養成工の同期や先輩など、同じ釜の飯を食った人的ネットワークを活用して解決を図る。これらは私が体験し見聞したほんの一例であるが、養成工を卒業した人達はこのようにして生産現場のリーダーとして高度経済成長を底辺から支えた。もしも日本に養成工制度が無かったならば、奇跡と呼ば

れる戦後の高度経済成長が達成し得たかどうか疑問だと思っている。働く我々も、経済的には苦しい中にも明るい出口が見え、働き甲斐も感じられる時期でもあった。

1993年に世界銀行が「東アジアの奇跡--経済成長と公共政策」と題した研究報告書を発表している。この中で、日本が経済成長を成し遂げた要因のひとつとして「高い人的資源と人的資本の蓄積」と分析している。これらは正に物づくり現場での養成工制度の成功を意味していると思われる。日本と同様の人的教育を持たなかった他の東アジアの国々では、当時の日本ほどの経済成長を達成し得なかったことも、この事を現していると思う。

しかし、その養成工も1970年頃を境に姿を消す。これは高校進学率と合致している。高度経済成長が始まった1954年の進学率は50.9%であるが、経済成長が終焉する1973年は89.4%であり、1974年以降は90%以上で推移する。そしてこの頃に養成工制度は消滅した。その後日本では養成工制度に代わる物づくりを支える教育制度は構築されていない。社会の趨勢から仕方がないことだとは思いますが、「工業立国」や「ものづくり日本」を標榜するとき、一抹の不安を覚えるのは私だけだろうか。

1991年のバブル崩壊後日本の経済は停滞し失われた20年と呼ばれた。そして2008年のリーマンショックもあり厳しい経済情勢はその後も続いている。厳しい経済情勢は働く人達の生活をも直撃し、就職難、非正規の増大、格差社会、マイナス金利など、枚挙にいとまがない。一部の経済学者の間では「資本主義経済の崩壊ではないか」とさえ言われている。

養成工を卒業した我々は孫を持つ世代となり年金生活者となったが、子や孫達の将来に対する不安が増大している。これからは、人生を楽しみつつも、物言う市民、賢い消費者として社会に向き合う必要があると感じる近頃である。